

おすすめは「伊吹有喜」

図書館係 阿部健治

今年の本屋大賞は町田そのこの『52 ヘルツのクジラたち』に決まった。この作品は町田の初の長編小説であり、筆者も正直ノーマークだった。「本屋大賞」には「書店員による掘り出し物の発掘」という側面があり、そういう意味では最高の結果になったわけだが、ここ 10 年ほど「本屋大賞」のゆくえに注目し続けてきた筆者としては、未だ受賞していない、かつてのノミネートの常連作家たち（森見登美彦や万城目学や柚木麻子や、そして大ファンの原田マハなどなど……）のことを考えると、ちょっと複雑な気分にもなる。しかし、この賞は投票で決まるので、「日本全国の書店員が**最も読んでほしい**と思った本」という事実はやはり重いと思う。ということで、筆者は未読なのだが、まずはこれを薦めておく。

筆者がじっくり読んだもので、自信を持って薦められるのが、第3位にランクインした伊吹有喜の『**犬がいた季節**』だ。三重県の四日市市にある進学校「八稜高校」（通称ハチコウ）における、昭和 63（1988）年度・平成 3（1991）年度・平成 6（1994）年度・平成 9（1997）年度・平成 11（1999）年度の5代にわたる卒業生を描いた連作小説で、その間、この学校では生徒会有志によって「コーシロー」という犬が飼われていた、だから「高校時代＝犬がいた季節」というわけだ。

この作品は他の小説と同じように、物語世界の外にいる作者の目からも描かれるのだが、時に犬であるコーシローの視点からも描かれる。犬であるコーシローは人間同士の異性を恋する匂いを嗅ぎ分けることができ、恋する思いは十二分にあるのに逡巡する人間たちをもどかしく思っ、そのスリッパをくわえ、相手のところに持って行ったりする。もちろん、人間はコーシローの思いを理解することはできず、「全くもう」などと言うだけなのだが。この設定は実にうまいと思う。進路や恋や友人や家族などを巡って揺れ動く高校3年生たちの心がとても印象的に伝わってくる。筆者は職業柄「高校生を描いた小説」には特に注目しているが、それらの中でも間違いなく上位に位置する作品だと思う。

「高校生を描いた小説」の最高の作品は、筆者の中では、第2回（2005）本屋大賞受賞作である恩田陸の『夜のピクニック』である。高校生という特別な時期にあるが故にそれぞれが抱かざるを得ない不安や嫉妬。それらが絡み合っ、高校生の間には数々の「謎」が生じる。「疑惑」などというものに発展するものもある。そんな中で高校生活最大のイベント「歩行祭」が行われる。これは、朝から全校で歩き始め、その夜は途中の体育館に泊まり、翌日の昼頃にゴールするというものだ。こういう、**特別な時間、特別な空間をともに過ごすことによって**、数々の謎が不思議に解けてくる（この様子が実に自然にリアルに描かれているのだ）。そういう経験を経て、自分とは違う仲間のそれぞれの思いを受け止めることができるようになる。成長とはこういうことだ、と思わせられる。2004 発表で少し古くなってしまったが、長く読み続けられるべき名作だと思う。

キュレーター（展覧会の企画をたてる人）の経験を生かした「アート小説」（ピカソを描いた『暗幕のゲルニカ』、ルソーを描いた『楽園のカンヴァス』など傑作が目白押し）で有名な原田マハには『でーれーガールズ』という作品がある。「でーれー」とは岡山弁で「すごい」という意味（「どえらい」という関西弁から出た言葉。名古屋では「どえりゃー」と言う。）。原田マハは父の仕事の都合で高校時代だけ岡山で過ごした。その経験を元にした作品で、1980 年の女子高校生が実に生き生きと描かれている。40 年前だから今とは全然違うこともあるが、とにかくエネルギーなのは同じで、「女子高校生」（の時代）とは本当に特権的なものなのだなと思う。暗い高校生時代（人生の中でも最低な時期だった！）を過ごした我が身には、ただただ羨ましいばかりである。

伊吹有喜の『犬がいた季節』には 1990 年代を通して見るという強い意志がありそうだ。伊吹にとっての 1990 年代とは 20 才代の 10 年だ。印象に残ることがたくさんあったのだろう。その時期に流行った歌やタレントのCMなどがふんだんに盛り込まれていて、5代にわたる高校3年生を眺めながら、時代の雰囲気も十分に感じ取れるという楽しみもある。1994 年5月の天才レーサーアイルトン・セナの事故死、1995 年1月の阪神淡路大震災、1995 年3月の地下鉄サリン事件（すべて 1994 年度の出来事）なども盛り込まれていて、それが高校3年生に大きな影響を与えるところなど、実にうまく作られていると感心した。

伊吹は「**時の流れ**」ということに極めて**鋭敏**な作家だ。『犬がいた季節』の最初の卒業生である早瀬光司郎（彼の名がもとで犬が「コーシロー」になった）は歴代の美術部員で最もうまいと言われながら、東京芸大受験に失敗し、経済的な問題もあって地元に残った。これに対して、彼に淡い恋心を持つ塩見優花は是非とも地元に残ってほしいという家族の期待を十分に感じながら、結局は漠然とした「新しい世界（土地）」への憧れに突き動かされて東京の私大に行く。その優花は大学を卒業してから数年後、やはり自分は地元にいるべき人間だと気づいて帰郷し、母校の教員になるが、その時には店（パン屋さん）を継いだ兄は事業に失敗して店をたたみ、父は死に、母は回復の見込みのない病人になっていた。

伊吹はこういうすれ違いをよく描く。伊吹のデビュー作は『49 日のレシピ』という作品で映画化もされているが、主人公と義母のすれ違い（これは年代による違いで、必然的に起こるのだが、時がたつと主人公にも義母の気持ちがよくわかってくるのだ。）が特異な設定の中でよく生かされている。また、同じく映画化された『ミッドナイト・バス』（主人公は大企業を退職して深夜バスの運転手になった男だ）では、「家族のすれ違い」というものが徹底して描かれる。しかし、それは誰かが悪いということではなく、それぞれに与えられた時間（人生の残り時間という方が正確か）の違いによって必然的に起こるもので、それを癒やしていくのもまた「時」なのだ、としみじみと感じさせて物語は終わる。

伊吹の作品で筆者が最も好きなのは『なでしこ物語』という作品だ。天竜川の源流にある峰生（みねお）の里の旧家で展開される物語は大河小説の様相を呈しており、既に続編の『天の花』と『地の星』（天の花は星で、地の星は花だというわけ）が世に出ているが、更に続編が連載中であるようだ。

面白くてページを繰る手が止まらないというのは筆者にとっても久々の経験だった。足女生にも是非手にとってほしい本である。